



今月の案内人
稲垣克朗さん(堀内町)



その31

堀内の大イチョウ

イチョウは「生きている化石」といわれ、今から1億年以上前に最も繁栄した植物です。その後、氷河期に多くの種類のイチョウが絶滅し、中国にあった物だけが現代に生き残ったと考えられています。この中国原産とされるイチョウが、朝鮮半島を経て日本に渡来したといわれます。このイチョウの樹高は30mと大きく、市の天然記念物にも指定されています。樹齢は推定300年で、わたしの祖先が近くの竹やぶに自生していたものをこの場所に植えたといわれています。

イチョウには雄木と雌木とがあり、この木は雌木で毎年秋には銀杏(ぎんぎょう)をつけます。昔は一、二俵(ばう)ほどですが、今は近所に配る程度。今年は6月に、なりたての小さな実の多くが落ちてしまい、実が大きくなるか心配しました。60数年見てきましたが、こんなことは初めてです。樹木医の診断では、「加齢は進んでいるがすぐに枯れることはなく健康」とのことでしたが、木が老いたのかな、とも思います。



「一番上まで登ると矢作川を歩き来する帆掛け船が見えた」との言い伝えがあり、子どものころ、矢作川の水面を見ようと登ってみましたが、幹の途中が細く、大きく揺れ、恐くて登り切れませんでした。登りやすい木でしたが、伊勢湾台風の後、その後遺症のためか、幹の上部が傾き、木のてっぺんも枯れ始め、枝も細くなるなど樹勢が衰えてしまったようでした。かつてのように登れません。300年間、わたしたちを見守ってきたくれたイチョウの木。今、その行く末を見守り続けるのが、わたしの役割だと思っています。



銀杏